

松風館十勝碑林に建立した詩碑

松風館即事

黄葉夕陽村舎詩 前三一十五

詩罷松窓夜幾更
 捲簾閑待柿歸鳴
 隣燈有影樟陰黒
 林雨將收竹氣清

詩 罷んで 松窓 夜幾更
 簾 を捲いて 閑かに柿帰の鳴くを待つ
 隣燈 影有りて 樟陰 黒し
 林雨 將に収まらんとして竹氣清し

(大意)

詩を吟じ終わって窓を見ると、枝ぶりのいい松が見え、夜もかなり、更けているようだ。簾をまいて静かにホトトギスが鳴くのを待っている。隣の部屋の行灯の光がクスの木をぼんやり照らしている。庭の林に降る雨もようやくあがるうとしており、竹藪から清々しい気が感じられる。

所見

黄葉夕陽村舎詩 前三一四

落日残紅在
 新秋嫩翠重
 遥雷何处雨
 雲没兩三峰

落日 残紅 在り
 新秋 嫩翠 重なる
 遥雷 何れの 処の雨ぞ
 雲は没す 兩三峰

(大意)

夕日が西の空を赤く染めている。野山の緑に囲まれた田圃の若苗の緑が目にしみる。遠雷の底鳴りはどこに雨を降らしているのだろうか。あっという間に雲が広がって、二つ三つ峰を隠してしまった。



詩碑「松風館即事」



詩碑「所見」

河相保之松風館同菅禮卿賦

頼春水

河相保之の松風館に菅禮卿と同一賦す

長松之下 故人の家
 鳴玉溪流不覺譁
 傳杯更愛幽香度
 屋角微風橘柚花

長松の下 故人の家
 鳴玉の溪流 譁しきを覺えず
 杯を伝え 更に愛す 幽香の度るを
 屋角の微風 橘柚の花

(大意)

大きな松の木の下に、古くからの友の家がある。屋舎にあがると玉を鳴らすような泉水がちよろちよろ流れているが耳障りにはならず、快い音色を響かせている。酒を酌み交わしていると、どこからか、ほのぼのとした得も言われぬ香が鼻をくすぐる。

さて、何のおいだろう。家の屋敷の隅の方から吹く風にのってくる。ああ、橘柚の花の匂いだな。



詩碑「河相保之松風館同菅禮卿賦」

制作 菅茶山顕彰会
 発行 令和四年二月
 ホームページ 菅茶山新報
<http://www.chazan.click>